

前 入 学 試 験 問 題
国 語 (A)

(配点二二〇点)

平成十四年二月二十五日 九時三〇分～一二時

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、この問題冊子は全部で十九ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 三、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 四、解答用紙の指定欄に、受験番号(第一面二箇所、第二面一箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 五、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。記入箇所を誤った解答は、その解答に限り無効とします。
- 六、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 七、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白には、何も書いてはいけません。これらに違反した答案は、無効とします。
- 八、この問題冊子の余白は、草稿用に使ってもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 九、解答用紙および問題冊子は、持ち帰ってはいけません。

受 験 番 号						
---------	--	--	--	--	--	--

上欄に受験番号を記入しなさい。

第四問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

幸福の青い鳥を探す長い旅から帰ったとき、チルチルとミチルは、もともと家にいた鳥が青いことに気づく。チルチルとミチルの以後の人生は、その鳥がもともと青かったという前提のもとで展開していくことだろう。それは、彼らにとつて間違いなく幸福なことだ。自分の生を最初から肯定できるということこそが、すべての真の幸福の根拠だからだ。だからわれわれは、そういう物語を、つまり『青い鳥』を、いつも追い求めている。だが、この物語は、同時に、それとは別のことも教えてくれる。つまり、——その鳥はほんとうにもともと青かったのだろうか？ それは歴史の偽造ではないか？ 彼らはいま、鳥がもともと青かったという前提のもとで生きている。過去のさまざまな思い出、現在のさまざまな出来事は、その観点のもとで理解されるだろう。そして逆に、その理解が、鳥がもともと青かったという事実のもつ真の意味を、つまり真の幸福とは何であるかを、いつそう明確に定義することになるだろう。このとき、彼らは解釈学的な生を生きているのである。

青い鳥と共にすごした楽しい幼児期の記憶は、確かな実在性をもつ。なぜなら、それが現在の彼らの生を成り立たせているからだ。たとえ、何らかの別の視点からはそれが虚構だといえるとしても、彼ら自身にとつては、彼ら自身を成り立たせている当のものであるその記憶が虚構であるはずはない。それが虚構であるなら、自分自身の生そのものが、つまり自分自身が、虚構ということになるからだ。解釈学的探求は自分の人生を成り立たせているといま信じられているものの探求である。だから、もし彼らに自己解釈の変更が起こるとしても、それは常に記憶の変更と一体化している。ここでは、記憶が誤っていることは、この本質からして、ありえないのだ。

だが、外部の視点から見れば、記憶は後から作られたものであり、その記憶に基づく彼らの人生は虚構でありうる。その鳥はほ

んとうはもとも青くはなかったのかもしれない。そして、もとも青くはなかったというまさにその事実こそが、彼らの人生に、彼ら自身には気づかれない形で、実は最も決定的な影響を与えているのかもしれない。もとも青かったという記憶自体が、そして、そう信じ込んで生きる彼らの生それ自体が、ほんとうは青くなかったというその事実によって作り出されたものなのかもしれない。記憶は、真実を彼らの目から隠すための工作にすぎないのかもしれないからだ。これが、過去に対する系譜学的な視線である。系譜学は、現在の生を成り立たせていると現在信じられてはいないが、実はそうである過去を明らかにしようとする。

時間経過というものを素朴なたちで表象すると、いま鳥がたしかに青いとして、もとも青かったか、ある時点で青く変わったか、どちらかしかないことになるだろう。それ以外にどんな可能性があるのか？ しかし、解釈学と系譜学の対立が問題になるような場面では、そういう素朴な見方はもはや成り立たない。もとも青かったのでもなければ、ある時点で青くなったのでもなく、ある時点でもともと青かったということになったという視点を導入することが、系譜学的視点の導入なのである。それは、鳥がいつから青くなったかを探求することでも、いつから青く見えるようになったかを探求することでも、ない。そういう探求はすべて、解釈学的思考の枠内にあるからだ。それに対して系譜学は、いつから、どのようにして、鳥がもとも青かったということになったのか、を問う。それは、これまで区別されていなかった実在と解釈の間に楔くさびを打ち込み、解釈の成り立ちそのものを問うのであり、記憶の内容として残っていないが、おのれを内容としては残さなかったその記憶を成立させた当のものではあるような、そういう過去を問うのだ。だからそれは、現在の自己を自明の前提として過去を問うのではなく、現在の自己そのものを疑い、その成り立ちを問うのであり、いまそう問う自己そのものを疑うがゆえに、それを問うのである。

だが、「ある時点でもともと青かったということになった」という表現には、本来共存不可能なはずの二つの時間系列が強引に共存させられている。「もとも青かった」と信じている者は「ある時点で……になった」と信じる者ではありえず、「ある時点で……になった」と信じる者は、もはや「もとも青かった」と信じる者ではない。だから、「ある時点でもともと青かったということになった」と信じる者の意識は、解釈学的意識と系譜学的認識の間に引き裂かれている。統合が可能だとすれば、それは系譜学的認識ウの解釈学化によってしかなされない。系譜学的探索が、新たに納得のいく自己解釈を作り出したとき、そのとき系譜学は解釈学

に転じる。青くない鳥とともにすごした、チルチルとミチルの悲しい幼児期の記憶は、確かな実在性をもつにいたる。

それなら、けつして解釈学に転じないような、過去への視線はありえないのだろうか？ 他人たちがただ私のためにだけ存在しているのではないように、過去もまた、ただ現在のためにだけ存在しているのではない。過去は、本来、われわれがそこから何かを学ぶために存在したのではないはずだ。それは、現在との関係ぬきに、それ自体として、存在したはずではないか？ 過去を考えるとき、われわれは記憶とか歴史といった概念に頼らざるをえないが、ほんとうはそういう概念こそが、過去の過去性を殺しているのではないか？ だから、記憶されない過去、歴史とならない過去が、考えられねばならない。このとき、考古学的な視点が必要となるのである。

そのとき、鳥がもともと青かったか、ある時点で青く変わったか、という単純な時間系列が拒否されるだけではなく、どの時点でもともと青かったことにされたのか、という複合的時間系列もまた、拒否されねばならない。いま存在している視点がいつどのような事情のもとで作られたかという観点から過去を見る視線そのものが、つまり、過去がいま存在している視点との関係のなかで問題にされることそのものが、否定されねばならない。

そうなればもはや、鳥はある時点でもともと青かったことにされたとはいえ、ほんとうはもともと青くはなかった、などとはいえない。もともとというなら、鳥は青くも青くもなくなかった。そんな観点はもともとはなかったのだ。そういうことを問題にする観点そのものがなかった。だがもはや、それがあある時点で作られたという意味での過去が問題なのではない。ただそんな観点がなかったことだけが問題なのだ。ほんとうは幸福であつたか不幸であつたか（あるいは中間であつたか）といった問題視点そのものがなかった、彼らはそんな生を生きてはいなかった。鳥はいたが色が意識されたことは一度もなく、したがって当時は色はなかったというべきなのである。

設問

(一) 「ここでは、記憶が誤っていることは、この本質からして、ありえないのだ」(傍線部ア)とあるが、なぜ「ありえない」のか、その理由を説明せよ。

(二) 「いまそう問う自己そのものを疑うがゆえに、それを問うのである」(傍線部イ)とあるが、どういうことか、わかりやすく説明せよ。

(三) 「系譜学的認識の解釈学化」(傍線部ウ)とあるが、どういうことか、わかりやすく説明せよ。

(四) 「過去がいま存在している視点との関係のなかで問題にされることそのものが、否定されねばならない」(傍線部エ)とあるが、どういうことか、説明せよ。